

## 「あきらめ」を明らかにする

フィールドクリエイター 福田京子

日々の生活の中、実に色々なことが起きてきます。そんな時、嫌なことや苦しいと感じることは辛いことです。一刻も早くその状態から逃れたい・・・そう思わない人は居ないでしょう。

あなたの心の奥の方に、ピタッと張り付いているような「あきらめ」はないでしょうか。この深いところの「あきらめ」はなかなか気づきにくいものです。

たとえば、幼い頃、親や先生や周囲の人から『ちゃんと我慢ができておりこうだね・・・』とか『泣かなかいで強かったね・・・』とその時に感じている辛さを我慢した時にほめられたり、我慢をしていることで自分の存在を認めてもらった体験はないでしょうか。

“子供を褒めて育てる”ということを手表面的な言葉だけで理解してしまうと、子供が直感的に感じている怖さや寂しさや嫌さに「我慢」を強いていることになりかねません。

子供にとって親から叱られることほど悲しく辛いことはありません。自分がその時感じていることを言うより、褒めてもらえるなら、自分の本当の気持ちを我慢するほうが良いと思っても不思議はありません。

そして気づきにくいのは、自分には直接的な体験はなくても家族の者、母親が理不尽な我慢をしているのを見聞きしているだけでも、切実な自分の「我慢」となって深いところに沈み込んでいる場合もあるからです。

この深い所に張り付いているような「我慢」は幼児のころから感じ取って、透明な幕のようになって「いのち」の発露を塞いでいるのです。

ひとたび身についた「我慢」は、感情を直接相手にぶつけないという現実の場面では良く機能しています。長い年月かけて培ってきたものであり、自我をむき出しにしないで、自分を冷静に保ってきた“生きる美学”となって不動のものになっているかもしれません。

アクティブの学びのなかでは、この「生きる美学」を自分の両手に乗せてじっ

くりと感じてみましょう。

自分の中から「人間として・・・」と言う確信的な思いや正義感がわき上がっている時、そこに留まってみてください。今まで何の疑問ももたなかったこと、反論の余地のない「正しい考え」や「美しい言葉」が「我慢」の隠れ蓑になっていることがあるからです。

お腹はなんと言っているのでしょうか？

タオ第18章

『からだの知恵がおとろえると 賢さや 知識が でばってくる』

タオのことを忘れてしまうと  
善だとか 追従とかがでばってくる  
からだの知恵がおとろえると  
賢さや 知識がでばってくる  
家族の中に平和がないとき  
家族愛が始まる

タオ いのちの声より  
(手塚郁恵訳)